

楔形文字 円筒印章の世界

1 回目

資料との出会い

山村君は佐藤さんに一枚のチケットを差し出した。
彼がアルバイトをしている駅構内の小さなショップは、主にコインと切手を扱っているが、各種イベントのチケットの安売りもしている。
チケットには“古代メソポタミア展～楔形文字の世界～”とある。

山村健一：頼まれたチケット、買っておいたよ。

佐藤久美：ありがとう。でもこれ、ずいぶん汚れているわね。

山村健一：いや、申し訳ない。

でも、楔形文字が見たいなんてどうしたの。そんな古代の文字にまで興味があるの？

佐藤久美：まあね。この前、安井先生の授業でちょっとだけ楔形文字の話が出ただけで、それ以来、なんだか少し気になってしまって。

山村健一：でも安井先生って、たしか漢文の先生じゃなかった？

佐藤久美：ええ。その時はたまたま甲骨文字の話題になって、ついでに古代の文字ということで楔形文字の話がでたの。先生も専門ではないから、詳しくは話さなかったんだけど、ご自分でも何点か、楔形文字の資料を持っているみたい。なんでも古代文字マニアなんですよ。これから先生の研究室に行ってみせてもらうことになっているの。一緒に行ってみない？

山村健一：僕が？

佐藤久美：チケットを汚した罰よ。付き合いなさい。

- - - 安井教授の研究室 - - -

安井教授：これなんですがね。

山村健一：土のかたまりみたいですね。表面の傷のようなのが楔形文字ですね。

佐藤久美：実物を見るのは初めてですが・・・これ、本物ですか？どこから出土したのでしょうか？

安井教授：本物かどうか分かりません。知人のところにあったもので、しばらくのあいだ借り出しています。出土も何も不明のようです。これは円形の粘土版、こちらは方形の粘土版。それから、これが粘土の封筒で、この中に粘土板が

入っています。最後は円筒形の石です。これは印章でして、絵と文字が彫り込まれており、円筒印章と呼ばれます。



円形の粘土版



方形の粘土版



粘土の封筒



円筒印章

佐藤久美：ここに刻まれた楔形文字は同じ種類の言葉を書き表したのでしょうか？
それぞれの資料が作られた時代はいつ頃なののでしょうか？

安井教授：わたしにも良く分かりません。何か知りたいということでしたら、まずは一般的な概説書から始めて、メソポタミアの歴史と楔形文字についての概略を学ぶということでしょうね。佐藤さん、手始めに書棚のその本を開いてみてください。

佐藤久美：これ、高校の世界史の教科書（『三省堂 世界史[B]改訂版』）ですね。

安井教授：高校の教科書は簡潔に説明してあるので概略を知るには最適です。最前線の説はありませんが、一般的に認められている考えが出ていますから、いろいろな勉強の出発点になります。見ようによっては宝の山ともいえます。

佐藤久美：そんなものなのでしょうか。受験勉強のときは、とてもそうは思えませんでした。が・・・。

教科書によりますと、メソポタミアの地方では紀元前 3500 年ごろ、シュメール人がいくつかの都市国家を発達させていたようです。その後、紀元前 2400 年ごろ、セム語族のアッカド人がシュメール人の都市国家を征服し統一国家をつくったとあります。

佐藤久美：セム語族ってなんですか？

安本教授：メソポタミアは現在のイラクにほぼ相当するわけですが、イラクでは主にアラビア語が話されています。そのアラビア語と特徴を共有するいくつかの言葉があります。それをまとめた言葉のグループにセム語族と名前をつけたわけですね。

もっとも、この教科書ではセム語を話す人たちをセム語族とっているようです。人種と言葉の系統とは直接の関係はありません。セム語族というのは人種をいうのではなく言葉の系統をいったものですから誤解のないように。

山村健一：最初のシュメール人も、そのセム語族なのですか？

安井教授：セム語とはまったく違っていたようです。シュメール人の言葉の系統は不明のようです。ですから、シュメール語と呼ぶよりしかたないようです。その言葉の特徴はどうであったか、ということは私も知りません。

佐藤さん、アッカド人の統一国家の後はどうなっていますか？ メソポタミアの地をめぐる各国の興亡と支配者の語族を黒板に簡単にまとめてもらえませんか。

.....

佐藤久美：こんなところでしょうか。

紀元前	事項
3500 年	シュメール人(語族不明)の都市国家繁栄 * 文字の発明
2400 年	アッカド人(セム語族)の統一国家 * メソポタミアに初めての統一国家形成
	統一国家は間もなく崩れ、しばらくの間、多くの民族が抗争
1800 年	アムル人(セム語族)がバビロン第 1 王朝(古バビロニア王国)樹立 * ハンムラビ王の時、最盛期。ハンムラビ法典
1600 年	バビロン第 1 王朝、ヒッタイト人(インド-ヨーロッパ語族)の侵入により滅ぶ

カッシート人(語族不明)の支配
アッシリア人(セム語族)の支配

671年 アッシリア人(セム語族)のアッシリア帝国、初めてオリエントを統一
* エジプトを含む大帝国を建設

612年 アッシリア帝国滅ぶ

新バビロニア、リディア、メディア、エジプトなど諸国が対立

525年 ペルシア人(インド-ヨーロッパ語族)のペルシア帝国、オリエントを統一
* ダレイオス(ダリウス)1世の時全盛期

山村健一：ところで楔形文字はいつ頃から使われることになるのでしょうか？

安井教授：概説書によりますと、シュメール人が作り出し、その後はメソポタミアの主要な文字となったらしい。

ずっと後のペルシア帝国のペルシア人は、楔形文字を表音文字として利用し、自分たちの言葉を表記したようです。

山村健一：どうも分からない点があるのですが。

年表によりますと、紀元前2400年頃までの楔形文字資料はシュメール語を書いたもので、その後の楔形文字資料はおもにセム語を書き、最後のペルシア帝国の楔形文字資料はインド-ヨーロッパ語を書いた、というように見えるのですが、そのように考えて良いのでしょうか？

それから、シュメール人の言葉と、その後のセム語族の言葉はずいぶん違うということですが、同じ文字を使って、違うことばを書いたということですね。何か問題はおこらなかったのでしょうか？

安井教授：山村君の一つ目の疑問についてですが、紀元前2400年以前の楔形文字資料が主にシュメール語を書き表したものであるというのはそうであろうと思います。これも「主に」ということで、シュメール語以外の言葉は全くなかったかどうかわかりません。

セム語族による統一国家ができてから以降ですが、これ以降の楔形文字資料が何語を書いたものか単純ではないような気がします。これはやっかいな問題でゆっくりと検討をするしかないようです。

二つ目の疑問点ですが、これは文字と音声の学問にとっておもしろい問題です。たとえば中国語です。これはふつう漢字で書きますが、ピンインというラテン文字を使用してつづることもできます。中国語の「山」(やま)をピンインで「shan」(発音はシャン)と表記することができます。これは英語などに用いるラテン文字を利用して中国語を書いた例です。

それから中国語と日本語ですね。これはまったく系統の異なる言葉ですが、同じ漢字を使っています。同系統の文字を異なる系統の言葉に応用するとき、どの様な工夫が必要であるか、どのような困難があり、その困難をど

のように克服したか、興味深いところです。メソポタミアではどうであったか、なかなか面白いですね。

君たちどうですか、もう少し深入りしてみようということでしたら、毎週この時間に集まることにしますが？・・・。

佐藤/山村：はい、それでけっこうです。

安井教授：それでは、今回は資料をながめてみましょう。円筒印章から始めましょうか。

それから、丁度良い参考書があります。これはドミニク・コロンの女性が書いたものです。『円筒印章 古代西アジアの生活と文明』（ドミニク・コロンの著 久我行子訳。東京美術。1996年）。円筒印章のことがいろいろ分かるかもしれません。次回までに目を通しておいってください。

***** 2回目は次のページへ*****

2回目

・・・お茶を飲みながら・・・

安井教授：今日は円筒印章の文字を眺めてみようということでしたね。

佐藤久美：印章といいますと、証明書に押すハンコのように、何かに押すのでしょうか？

安井教授：ただ押すのではありません。粘土が軟らかいうちに押しつけて転がします。円筒の石に図柄が彫り込んであります。こういったものを陰刻というのですが、これを粘土の上に押しつけて転がすと、彫った部分が盛り上がり浮き出てきます。こうして円筒印章が押された楔形文字の粘土板は数多く出土しているようです。



佐藤久美：右端の円筒形の石が印章で、左が粘土板ですね。この粘土板も古代のものでしょうか？

安井教授：いえいえ、右端の円筒印章は古代の遺物ですが、画面の粘土板は私が作ったものです。誤解の無いように。

佐藤久美：前回紹介していただいたドミニク・コロンの『円筒印章 古代西アジアの生活と文明』には印章が押された古代の遺物がありました。先生のところにはないのでしょうか？

安井教授：前回、幾つか粘土板などを出しましたね。じつはあの中に円筒印章が押されたものがあったのです。

その引き出しの中にあります。佐藤さん、ちょっと取ってください。

安井教授：左は前回見た四角い粘土板の一部です。この粘土板は、穀物の領収書であるとのこと。円筒印章が押されていますね。拡大すると、このようになります。やはり、スカートの女性が立っています。左に楔形文字がありますが、よく見えません。

右は前回見た粘土の封筒です。じつは側面に円筒印章が押されていたのです。



四角い粘土板の一部



粘土の封筒の側面

佐藤久美：どちらも文字は良く見えませんね。

安井教授：たしかに。私が円筒印章を転がして作った粘土の板、こちらの文字はハッキリしていますので、まずはこれを検討してみましょう。

これは拡大した写真です。



佐藤久美：右側はスカートを着た女性でしょうか。スカートのヒダまで見えますね。左側は、腰に棒状のもの、剣かもしれません、それを持った男性でしょうか、ふたりの人物がむきあっています。左側に楔形文字の銘文が三行あります。どちらから読むのでしょうか？

安本教授：初期の楔形文字の資料は、縦書きの日本語と同じ要領です。縦に右から左に読んだようです。もっとも、我々が多く目にする後の時代のものは、英語のように横書きで左から右に読むようになっています。

それで、円筒印章のばあいですが、どういうわけか後の時代のものも縦に右から左に読むようになっているようです。擬古的なのでしょうかね。それぞれ何字ありますか？

佐藤久美：右端の1行目は6字、真ん中の2行目は5字、左端の3行目は5字、のように見えます。なにが書いてあるのでしょうか？

安本教授：さあどうでしょう、私にもわかりません。とりあえず楔形文字をローマ字に置き換えて、それから辞典で調べるといっていいのでしょうかね？

山村健一：あの・・・、この本（『円筒印章 古代西アジアの生活と文明』）の写真ですが、いま見ているこの印章と、形が似かよっているというか、雰囲気こそっくりなものが幾つかあります。それぞれ比べてみたら何かわかるかもしれません。

・・・・田中君、黒板になにやら書き始める・・・・

193 番(p.63)

***** イルシ・イニシ
A***** アタハ・イ-の息子
B***** 礼ガル神のしもべ

185 番(p.61)

***** クアルドム
A***** イッテ・イン・テリウムの息子
B***** アカ・ラムのしもべ

193 番、185 番と番号が付いている円筒印章があります。二つの印章に共通する楔形文字はローマ字で A B としました。それ以外の文字は * で書いてみました。僕は、楔形文字は読めないのですが、もしもドミニクさんの読みが正しいとしたら、共通部分の A は「息子」のはずで、B は「しもべ」のはずです。

もうひとつ似たような印章があります。194 番です。これも 193 番とくらべると、

193 番(p.63)

***** イルシ・イニシ
A***** アタハ・イ-の息子
B C***** 礼ガル神のしもべ

194 番(p.63)

***** シヤ・ナヤ
A***** ザルケムの娘
D C***** ナヤ女神の女しもべ

A という楔形文字は、193 番と 185 番で「息子」と対応しますが、194 番では「娘」と対応します。C ですが、193 番では「神」、194 番でも「神」に対応します。もっとも、194 番では「女神」に対応するのかもしれませんが。194 番の印章には「しもべ」に対応する B はありません。もしかして D が「女しもべ」に対応するのかもしれませんが。

それで、A は「息子」か「娘」、B は「しもべ」、C は「神」か「女神」、D はおそらく「女しもべ」ということになります。

佐藤久美：そうすると研究室の円筒印章はこうなっているから。

 A*****
 B C*****

これは「***** (人名)、***** (人名) の息子 or 娘、***** 神 or 女神 のしもべ」と書いてあることになる。

でもへんね。息子と娘がどうして同じ文字 A に対応するのかしら。それに神と女神も同じ文字 C に対応しているかもしれないと言うのはどういうことかしら。他人の解説を参照して、新しい資料の解説をするなんて、歯がゆいですね。

先生、なんとか直接確認できないものでしょうか？

安井教授：たしかに靴の上から足の裏を搔いているみたいだね。じつはドミニク女史の本と一緒に『アッカド語～楔形文字と文法～』（飯島 紀著。国際語学社。2000年）という本を注文しました。そこにあるから開いてみてください。なにか参考になるといいのですが。

佐藤久美：絵文字とそれに対応する楔形文字を並べた部分があります。これによりますと……

Aは「小さい、子」、Bは「男、奴隷」、Cは「神」とあります。それから、ドミニクさんは194番の2行目「A * * * *」を「ザリムムの娘」と解読するわけですが、この『アッカド語』に拠るとAの次の*は「女」をあらわす字のようです。これを*女と書くことにします。単独のAが「息子」で、*女を付けた「A *女」が「娘」ということになります。

それから、ドミニクさんは194番の3行目「DC * * * *」を「ナヤ女神の女しもべ」と解読するわけですが、『アッカド語』に拠りますとCの前のDは、これ一字で「下女」という意味のようです。これがドミニクさんの「女しもべ」に当たります。

Cは「神」とあります。この後に「女」をあらわす文字があれば「女神」となり都合が良いのですが、そのような文字はないようです。ですからこの場合、実際には「神ナヤ」としかないと、ナヤが女神なので、ドミニク女史が訳を補って「女神ナヤ」としたのではないでしょう。

安井教授：なかなかおもしろいですね。193番と194番によれば、1行目は印章の所有者の名前。2行目は世俗での自分の位置づけ。3行目は宗教界というか超世俗での自分の位置づけということになるね。自分が何者か、ということを確認するためには、これで完璧ということになる。

ところで185番の3行目は神ではなくて「アバ・ラム」となっていますが、これは何者ですか？

山村健一：ドミニクさんの解説によりますと、「アバ・ラム」はカラナという都市の支配者のようです。「神のしもべ」というときと「支配者のしもべ」というときではどの様な違いがあるのか興味深いですね。

ともかく、この研究室の円筒印章には「* * * * (人名)、* * * * (人名)の息子、* * * * 神のしもべ」と書いてあることは間違いなさそうです。

安井教授：なるほど。そうすると、これまでに意味のわかったABC、それに194番のDは、一字で一つの語を表わす文字ということになる。

そうするとこれは中国語の漢字と同じ表意文字ということになりますね。それ以外の部分は名前ですから、おそらく表音文字で綴ってあるのでしょう。

山村健一：その表意文字の部分ですが、楔形文字のAは「小さい、子」で「息子」の意

味。A+*女は「娘」。Bは「男、奴隷」で「男しもべ」にあたります。194番のDは「女しもべ」です。

そうしますと次のようになります。

1字	2字
A (息子)	A+*女 (娘)
B (男しもべ)	
D (女しもべ)	

A(息子)とA+*女(娘)は1字と2字からできあがっている語のペアで、B(男しもべ)とD(女しもべ)は1字の語のペアとなります。2字のA+*女は1字の「A」からできたと考えてよく、文字を作った時点で「息子」と「娘」は区別されることはなかったということになります。

それとは別に、「男しもべ」と「女しもべ」は当初から区別されていたということになります。このような語の分け方には、それを作った人たちの文化が反映しているようでおもしろいですね。

安井教授：「B(男しもべ)」と「D(女しもべ)」のペアは共に1字ですが、それぞれの文字がどのように作られているか、その構成要素も調べる必要がありますね。要素にまで分解して比べたならば、両者に違いがあるかもしれません。それは今後の宿題ということにして、今日はこのくらいにしておきましょう。

***** 3回目は次のページへ*****

3 回目

安井教授：私たちはシュメール語もアッカド語も知らない素人ですが、この円筒印章に「**** (人名)、**** (人名) の息子、**** 神のしもべ」と書いてあるのだろう、というところまではわかりました。

佐藤久美：「**** (人名)、**** (人名) の息子、**** 神のしもべ」と書いてあるということですが、この本(『アッカド語～楔形文字と文法～』)のどこを開いても、名前を書いた部分の文字が見つかりません。どうも網羅的ではないようです。

文字の一つ一つをローマ字に置き換えて発音の概略を知るにはどうしたらいいのでしょうか？ ローマ字に置き換える文字表みたいなものは無いのでしょうか？

安井教授：デイビッド・マーカスという人が書いた『アッカド語入門』(*A Manual of Akkadian*, DAVID MARCUS, UNIVERSITY PRESS OF AMERICA, 1978) という本がありまして、初めの箇所文字表が出ています。この本は楔形文字のアッカド語を段階的に学習することができるように編纂されているようです。以前、わたしも挑戦してみたのですが、なかなか難しい。とくに動詞の活用のところはやっかいです。

これは、やってみて感じたことですが、アラビア語などの現代の代表的なセム語を同時に学び、言葉の全体像に触れながら、この本に挑戦したならば、少しは効果が上がるかもしれませんね。

山村健一：この円筒印章については、漠然と内容の見当はついたわけですが、ここに文法的な関係を示す語があるかどうか確認できていませんし、記された言語がシュメール語なのかそれともアッカド語なのかということすら、素人の僕らには分からないといったところですね。

安井教授：いずれにしても、もうすこし詳しくメソポタミアの状況を知りたいですね。シュメール人とアッカド人・アッシリア人などセム語を話す人たちとの関係がわかりません。これは、各王朝の楔形文字資料が何語で書かれたか、ということとも関係してきます。それに、出土している資料がどの時代のどの王朝に属するかということについて理解するためにも、メソポタミアの歴史を確認しておく必要があります。

君たち、書架からの何か適当な本を持って行って調べてみてください。

佐藤久美：この『図説世界文化地理大百科 古代のメソポタミア』(松谷敏雄監訳。朝倉書店。1994年)はどうでしょうか、それから『ビジュアル版世界の歴史 2 古代のオリエント』(小川英雄著。講談社。1984年)もお借りします。

山村健一：なにか楔形文字のことがわかる入門書はありませんか。

安井教授：『楔形文字』(クリスファ・ウーカ著大城光正訳。学芸書林。1995年。原本1987年)があります。これは比較的最近のものです。

もう一つ、『楔形文字入門』(杉勇著。中公新書。1968年)があります。

．．．．お茶を飲みながら．．．

佐藤久美：安井先生、ひとつ提案があります。

どうでしょう、マークスさんの『アッカド語入門』を読んでみませんか？

山村君はどう？

山村健一：ぼくもぜひ読んでみたい。何か良い辞典があれば多少はやりやすくなるとおもうのだけど。

安井教授：君たちが読みたいということでしたら、少しずつでも挑戦してみましようか。私は以前挫折したから、再挑戦ということになりますが。長い戦いになるとおもいます。

それから辞典の代わりにするものとして、ラバという人の『アッカド語入門』（*Manuel d'Epigraphie Akkadienne*, R.Labat）に付いている語彙集がいいようです。これは古い本ですが何度も再版されていますので、次回までに用意できるとおもいます。

*****以上で円筒印章の世界を終わりにします*****

この項目は吉池孝一が担当しました。